

第二話 二年後

「よおおおお～倫也あああ！やああああ～つと見つけたぞ～！」

「喜彦……？」

年が明け、大学の冬休みもようやく明けたかと思ったらすぐに突入する三連休の最後の日。

……要するに、成人の日。

「そうだよ喜彦だよ！ アニメ第一期、第二期ともに登場していたにもかかわらず、劇場版で華麗にスルーされたお前の親友上郷喜彦だよ！ まさか忘れてた訳じゃないだろうな!？」

「いや、もちろん覚えてたけど……ただ、お前もだいぶ忙しくなっちゃったから、モブじゃなかなか呼び辛くてな」

……そんな本編の内容とは直接関係ない会話はさておき、その、誕生二〇年の若者の前途を祝うイベント会場の一つである私立豊ヶ崎学園では、たった今講堂での式典が終了し、招待者たちがぞろぞろと校庭になだれ出て、ところどころでほぼ二年ぶり会話を花を咲かせていた。

なお、今ここにいる人物の紹介の方は会話でほぼ済ませたので地の文の方では割愛させていただきます。

「や～、にしてもほんとと久しぶりだなあ倫也。卒業して以来か？ お互い実家なんだからもっと連絡くれよ～」

「悪い。色々忙しくてな。それに……」

「で、結局今、加藤さんと澤村さんのどっちと付き合ってたんだよ？」

「……そういう聞き方をされるのが嫌だったというのもある」

「だってよ、お前、二年の時は加藤さんとほぼ夫婦だったくせに、三年の時は、あの澤村英梨々とすっげえ親しげにしてさ～」

「前にも言っただろ。実は英梨々とは子供の頃から家族ぐるみで付き合いがあったって」

なお、高校三年時の教室での描写は、劇場版では全カットされているので原作八～一三巻を参照いただければ幸いです。

「で、加藤さんの方は？」

「ただのサークル仲間だよ……少なくともあの頃は」

「そういえば、式典の前に晴れ着姿の澤村さん見かけたなあ。大勢の男子に取り囲まれてて近づくこともできなかったけど」

「まあ、あの金髪はどこにいても目立つからなあ」

「加藤さんは見つけれなかったけど」

「……ステルス性能未だに健在、か」

「で、お前はもう二人と話したのか？ たとえ毎日会ってるにしても、今日、着物姿を褒めなきや恨まれるだろ」

「いや、俺もさつきから捜してるんだけどな……」

※

※

※

「あ、あのさ、英梨々……」

「モデルが動かないの！ 恵」

「……着物のまま絵を描いてると、袖が絵の具で汚れない？」

そして、当の倫也が捜していた二人……加藤恵と、澤村英梨々は、彼から数十メートルしか離れていない場所に、いることはいた。

「だからって着替えてる時間なんてないのよ。夕方の同窓会までには仕上げないといけないんだから、これ」

「え〜と、だから、どうしてこうなったのかなぁ？」

「仕方ないでしょ！恵の一生に一度の晴れ姿なのに、スマホのカメラ程度でしか残せないなんて許される訳がないんだから！」

「その主張はとっても嬉しいけど、それを成人式前にいきなり言い出して、せっかくの式典をすっぽかさされたのはどうかと思わないでもないんだけど」

その場所は、英梨々が高校時代によく過ごした、美術室の奥にある、第二美術準備室。高校時代、売れっ子イラストレータ！としてだけでなく、豊ヶ崎学園美術部のエースとして鳴らした英梨々がほぼ独占していたその部屋は、今でも彼女の作品や画材道具が、当時を懐かしむかのようにたくさん残っていて。

だから英梨々は、準備室に入ると慣れた手つきでキャンバスを立て、向かいに恵を座らせ、高校時代の二人の関係に戻った。

問題なのは、それがせっかくの二人の晴れ舞台となる式典開始とほぼ同時刻だったというだけで。

「ま、それはともかく、お互い成人おめでとう！これでお酒もタバコも解禁ね！」

「えっと、厳密に言うとなたしはもう二十歳になってるけど英梨々は三月だよな？」

「まあ、恵の場合は、その前に一八歳でもっと大切なものを解禁しちゃったけどな」

「え……」

「選挙。あたしは結局まだ行けてないんだけどね」

「……………」

「……もしかして恵、何かと勘違いした？」

「選挙権が一八歳以上になったのとわたしたちが一八歳になったのとどっちが先か考えてただけだよ」

「たった二年前のことなのに？」

「原作の開始時期とアニメの開始時期とリアルタイムのどこを基準にしたらいいか迷っただけだよ」

ちなみに原作の開始時期(二〇一二年)基準にすると、劇場版のエピローグは二〇十九年ということになり、これはこれでそこそこいい落としどころなのかもしれない。

「そ、それで英梨々、大学の方はどう？ 確か多々良美大だったよね？」

「そんなのほとんど行ってないわよ。そもそも入試受けた記憶さえないし」

「……えっと、それは言っちゃいけないやつなんじゃないかなあ」

「そんなこと言ったって、仕事の方が死ぬほど忙しいんだもん……紅坂朱音も町田さんも容赦なくてさあ」

と、まあ、そんなことはともかく……

英梨々が問答無用で恵を美術準備室に連れ込み、その晴れ姿を描いているのには、もちろん、彼女が語る以外の理由があった。

そしてその英梨々の提案は、恵にも、同じ理由で渡りに船であり。

「映画にもなるもんね、英梨々と霞ヶ丘先輩の作品……」

「ま、実写版の方はほとんど関わらなかったけど、今度のアニメ版は、デザインからがつりやらせてもらってるわよ」

「今日、ここにいるみんなは知らないんだね……英梨々が、あの、『フィールズクロニクル XIII』や『世界で一番大切な、私のものじゃない君へ』の柏木エリだって」

「知られてたまりますかって……そうでなくても今日一日で何人の男に声掛けられたか」

「相変わらず、人気だね、英梨々は」
「恵だって相変わらず結構人気じゃない。一〇人以上には声掛けられてたでしょ？」
「わたしの場合、多分、ハードル低そうって思われてるからだけだね」
「違う違う、高校時代から隠れファン多かったのよ、恵は」
「そうかなあ？ あの頃は男子から声掛けられることなんてあんまり……」
「いつも変なのがまとわりついてせいで、誰も近寄れなかったのよ」
「あ、あ〜」
「……………」
「……………」

キャンバスを介してなら、わだかまりなく、話せると思ったから。
昔通り、恵に対して、ちょっぴり傲慢な自分でいられると思ったから。
昔通り、英梨々に対して、ちょっぴり押され気味な自分でいられると思ったから。
そうでもしないと、お互い、何を話していいか、わからなかったから。
……たった今、こうして禁断(倫也)の話題に触れてしまった時のように。

「……卒業式、以来ね」
「……うん」
二人が、こうしてはっきり顔を合わせるの、実は、二年ぶりのことで。
かつて親友の契りを交わし、一度絶交し、けれど仲直りして、さらに強く絆を強めたはずの二人は……
「倫也、元気にしてる？」
「う、うん……いつも通り」
けれどその時、まだ心の底に、お互い譲れないものを抱えたままで。
だからそのことも含めて、全てに結論を出した二年前のあの時……
「仲良く、してる？」
「ま、まあ、普通、かな」
親友という肩書きと、お互いの認識はそのままに。
ちょっとした、けれどなかなか乗り越えられない距離ができてしまっていた。

恵は、節目節目のイベントには、必ず英梨々にメッセージを送っていた。
新年、誕生日、新作発表、作品の発売日、映画化決定、そして次の新年、誕生日……
英梨々も、そんな恵のメッセージに、感謝と意気込みを添えた返信を欠かさなかった。
けれど英梨々の返信は、良く言えばシンプルで、悪く言えば素っ気なく。
恵のメッセージも、良く言えば控えめで、悪く言えばそれ以上踏み込まなかった。
二人で会う約束も、『blessing software』の新旧メンバーで会う約束も、もちろん、倫也を交えて三人で会う約束も、どちらからも、提案することはなかった。

それに、恵は一度、偶然、英梨々を見かけたにもかかわらず、声を掛けずに隠れてしまうという、致命的な失敗を犯してしまっていた。
……まあ早朝に倫也の家から出てきたところだったので、仕方ないといえば仕方ないことではあったのだけど。

だからまた、そしてまだ、二人はお互いの距離感を、微妙に測りかねて……

「……け、倦怠期、来てない？」

「そ、それは……来てないよ」

「不満、溜まったりしない？」

「溜まってない、って」

「本当？ 愚痴なら聞くわよ？ 遠慮なく言ってくれても……」

「ないから本当はないから」

だから『しみじみしたふりして、そういう小姑みたいな言い方やめてくれないかなあ』などというツッコミも、思いはすれど口にはなかった。

「そ、そっか……そんなに、うまく行ってるんだ……」

「え、えつと、そこまでいうほどじゃ……」

「じゃあやっぱりうまく行ってない!? 愚痴ならっ」

「ない、愚痴ないから」

そして『相変わらず遠慮するふりだけはしておいて、根はめっちゃ強情なんだから』という感想も、思いはすれど口にはなかった。

「あ、でも……一つだけ、愚痴っぽいこと、あるかも」

「な、なに？ なにっ?。」

「最近、倫也くん、さ……講義、さぼりがちなんだよね。試験前になると、去年のわたしのノートに頼るようになってっやって」

「そ、それって中退の危機？ 理由は倦怠期による浮気？ 新しい女のところに入り浸って大学どころか恵のもとにも帰ってこないとかっ!？」

「違うから全然違うから。ていうか倦怠期好きだね英梨々」

そして二人は、少しずつ近づき始めてきたという手応えと、近づいてきたゆえにお互い刺し合い始めているという危機感を抱えながら、その、落としどころの見えない会話を手探りのまま続けていく。

「波島君と二人で、色々やってる」

「波島とっ!? そ、それって、ま、まさか……っ」

「違うから多様性関係ないから」

「じゃあ、何なのよ？ 変に期待させないでよ！」

「色んなところに行って、色んな人に会ってるみたい。あと勝手に変な期待しないで」

「色んな人って？」

「税理士さんとか、知り合いの経営者の人とか……話聞いたり、相談乗ってもらったりしてるんだって」

「……それ、つまり」

「うん、商業化、狙ってるんだ……『blessing software』のね」

「……恵は、いいの？」

しばらく、筆も口も止めて、自嘲的な恵の表情を眺めていた英梨々は、こちらも苦笑交じりのため息とともに、もう一度、言葉と描画を再開する。

「さすがこ、もうちょっと真面目に大学来てもらえないかなあって。そりゃ、サポートはするけど、本人がその気にならないと、このままじゃ留年だって……」

「そっちじゃなくてさ、商業化の方……その流れだと、当然あんたも巻き込まれるでしょ？」

「ま、副社長やらされるっばいけどね。いつもみたいに波島君が『いやあ、僕は肩書きには興味なくてねえ』みたいにスカしてるし」

「言っとくけど、そんな甘い業界じゃないわよ？ そもそも聞こえだけはいいせいで、実力もないくせにただ好きなことを好きなだけしたいってだけの甘ったれた連中が次から次へと押し寄せてきては、あっという間に夢破れて借金抱えて夜逃げしておきながら、気づけば別の会社立ててしれっと復活してるような場所なんだから。そういうのはまず関係各所に謝罪してちゃんと借金を清算してからにしろってのよこの××××！」

「えっと、最後の方は結構甘い業界のようにも聞こえるんだけど……」

あと未払いの報酬とかもちちゃんと支払ってから業界に復帰して欲しいものだけど本質はそこではないので割愛する。そんなに怒ってないから挨拶くらい来なさいこの××××。

「逃げようが潰れようが、危険なことには変わらないでしょ……もうお遊びじゃなくなっちゃうのよ？」

「そう、なんだよねえ……」

「恵みたいな普通の女の子が、覚悟もないのにそんなのに巻き込まれたら……」

「だから、愚痴なんだよ……どうせ言っても、止まらないから、さ」

「あ……」

その瞬間、恵の表情が、変わった。

それは、写生をしている人間からしたら『ちょっと！ そんなに表情動かさないでよ！』と怒るくらいに、劇的に。

「倫也くんは、英梨々を追いかけることしか、
考えて、ないんだよねえ……」

そして、『何で最初からその顔してくれないのよ……』と嘆くくらいには、魅力的に。

「……詩羽も、でしょ？」

「ま、今ここにいない人も入れたら、そうなるかもしれないけどね」

それは、諦め混じりで、拗ね気味で、恨みがましく、嬉しげで。

「でも、倫也くんの一番最初の衝動は、英梨々なんだよ」

嫉妬交じりで、嘆き気味で、あてつけがましく、誇らしげで。

「だって、英梨々こそが、彼がオタクになった、理由なんだからさ」

「……正確には、あたしのパパとママ、よ」

「ついでに初めての友達も、初めての絶交も、そして、初めての……」

「恵……」

そんな絡みあった感情を一身に受け……

英梨々は、その覚悟の大きさに、圧倒された。

「倫也くんは、英梨々が相手である以上、思いっきりこだわる。

そして、英梨々が相手である以上、平静ではられない」

「負けても悔しいし、勝っても悔しい。

勝ったら喜ぶけど、負けたらほっとする」

「もし英梨々が夢破れたら、

自分が夢破れた時よりも、落ち込んで……」

「そして、もし、英梨々に何かあったら、
わたしなんか放っておいて駆けつける。
……三年前に、したように、ね」

「……勝者の余裕？」

「これはね、英梨々が思ってる以上に深刻な事態なんだよ？」

英梨々の目の前で、また、恵の表情が変わった。

「……曲がりなりにも、恋人、やってる身としては、ね？」

……自分を可愛く睨みつける、恨みがましくも瑞々しい表情へと。

「ほんっと、執念深い女ねあんた。まさに正妻ってやつ？」

「……ノーコメントで」

「言っとくけどねえ恵、そんな特別なあたしを押しのかたあんだって、十分おかしいのよ？」

そして英梨々は、多分、自分もつられてその表情になっていることを自覚しつつ、そんな恵の攻撃を、迎え撃つ。

「あたしには、理由も歴史もきっかけも、何もかもあった。
あいつがどんなに馬鹿でくだらなくて駄目な奴でも、
それを補って余りある運命があった」

「けれど恵、あんたは一体なに？」

子供の頃の、天使みたいに可愛かったあいつを見たことなくて、
高校生になってからの腐りきったキモオタしか知らないくせに、
なんで、そんなの好きになっちゃう訳？」

「それは、ほら、えっと……

か、霞ヶ丘先輩に聞いてみればいいんじゃないかなあ？」

「ううん、あんたやっぱり、詩羽以上の変わり者よ。
だって、あいつと違って、倫也とは趣味も嗜好も、
人生の方向性さえ、何もかも違ってた」

「なのに、あんなオタクで、現実見ない夢ばかり追ってる向こう見ずに、
いつまで拘っちゃってんのよ？」

その数秒の、二人の会話は……

きっと、ゲームだったら、火花エフェクトとか画面揺れとか雷鳴的な SE とか、様々な演出が施されたに違いなかった。

けれど画面の外で行われていたこの対決イベントは、そんな激しい内容とは裏腹に、ただ淡々と静かに会話だけが進み。

「……メインヒロインですから(彼女)」

最後には結局、このキラーワード一つで、無理矢理収まってしまう。

「だから仕方なく、いつも近くで目を光らせてるんだよ……失敗したら、早めに現実的な落としどころを見つけてあげないといけないし」

「本当は、プレーキかける気なんかないくせに……」

「え～、そんなことないよ～」

「……久々に聞いたわ。あんたのその超誠意もってない喋り方」

そして後にはまた、確かにふたたび距離を詰め、今までよりも一層、仲良く、そして仲悪くなった二人が出来上がる。

「やっぱり、ちゃんとあんたたちのこと監視しとかないと駄目ね……」

「お互いに、ね」

「あんたたちの会社が、あっさり潰れたりしないように」

「英梨々が、突然失敗したりしないように」

「あたしの精神衛生上、仕方なく」

「わたしの精神衛生上、仕方なく」

「……少なくとも、年に二度は会って状況確認しない？」

「となると、お互いの誕生日、かなあ？」

「……その翌日ね」

「九月の二四日と、三月の二一日？」

「そうそう、だって誕生日当日は、あんた倫也と過ごすでしょ？」

「……英梨々は？」

「そこは色んな配慮があるから、当面は詩羽ね」

こうして二人は、これからも“適度な”親友を続けていく誓いを立てる。

遠くでも近くでもないところから、強くも弱くもない視線で見つめ。

友愛と、心配と、憧れと、嫉妬と、そんな複雑な感情を抱き合い……

「……できた！」

そして、その誓いをお互いの胸にしまったところで、英梨々の絵筆がようやく止まり。

描き上がったばかりのカンバスを両手に取り、得意げに恵の方へと反転する。

そして恵は、英梨々のその自信満々な所作に押され、自らの肖像画にじつと見入り…

「……………え」

なんとも言えない、微妙なりアクションを返した。

「あ、あの、英梨々……？」

「いやあ、やり切ったわ～、現時点でのあたしの最高傑作だわ～」

「ちょっと待ってちょっと待って英梨々。なんでこの絵半脱ぎなの？」

「いいでしょこの構図！胸元のはだけ具合とか汗の描写とか、裾から覗く長襦袢の白さとかふくらはぎの艶めかしさとか足袋の足裏とか！」

「わたしがしてたポーズと全然違うんだけど。ていうか下着とか見せてないのになんで描かれてるの？ あとこの太股のところに垂れてる白っぽい液体はなに？」

「いや～、最近、一般向け商業ばっかで、なかなかこういうの描けなかったからさあ、いいストレス解消になったわ～」

「これって完全に事後……じゃなくて事故だよな？ なんても描いてるの？」

「え？ だって、この方が倫也、喜ぶでしょ？」

「え？ なにこれわたしにじゃなくて倫也くんへのプレゼントなの？」

「え？ 恵、これ自分でもらって嬉しい？」

「……自分でもらって嬉しいものを描いてくれてると思ってたよ」

「あれ？ 認識違い？ これ倫也に渡しちゃ駄目なの？ もし見せたら、この構図リアルで再現したいって言い出すかもしれないのに？」

「それをわたしが喜ぶと思う方がどうかしてるよ英梨々」

「ん～、仕方ないなあ。それじゃこれ、せっかくだから、どっかの展覧会にでも……」

「……他の人に見られるくらいなら、倫也くんだけで」

「……あんたそういうところよ恵」

(了)